

経験の帰属空間と形容詞文の諸問題(Ⅲ)

山 岡 政 紀

(Ⅱよりつづく)

14. 形容詞が取る意味格について

次節、次々節において、形容詞文の格に関連することを考察するため、ここで、その基礎として理論的枠組みを整理しておきたい。

意味格（深層格）は、動詞を中核とする命題の中で、動詞に対する名詞句の意味役割を記述したものであることは、格文法でも今日の変形文法における θ 役割でも一貫しているが、日本語では、形容詞が述語となり、動詞と同様の分布を占め、命題の中核となることができる。従って、そのような命題の中核たる形容詞に対して名詞句が一定の意味役割を担うことを認めることができ、これによって、形容詞の意味格を想定することが可能となる。但し、若干の問題点があるが、これについては本節の最後に述べる。

形容詞が取る意味格は〔表2〕の主に三つである。〔表3〕に格表示を添えた例文を示す。なお、見やすさのために分かち書きしてある。

〔表2〕 形容詞が主として取る意味格、及び対応する形式格

〈意味格〉	略称	〈対応する形式格〉
経験者格 (Experiencer)	Ex	ニ, ニトッテ, 無格
対象格 (Objective)	O	ガ, 無格
目標格 (Goal)	G	ニ

[表 3] 各種の形容詞文における意味格表示

	形容詞文の各タイプ		類似の動詞文
①	犬が こわい。 +O +Adj	①	犬が 歩いている。 +O +V
②	太郎は 犬が こわいらしい。 +Ex +O +Adj	②	太郎には 犬が 飼育できる。 +Ex +O +V
③	太郎は 子どもに 優しい。 +O +G +Adj	③	太郎が 子どもに 話しかける。 +Ag +G +V

若干の説明を加える。第一に、動作主格 (Agentive: 略称 Ag) は、その意志によって動詞によって表される動作的概念を発動させるものであり、従って、状態性述語である形容詞は、一切動作主格をとらない。

第二に、形容詞のガ格はすべて対象格 (O) であると考ええる。本稿の立場では対象格を取る述語を動作的述語に限定しない。対象格は最も中立的な性格を帯びた格であると考ええる。形容詞の対象格は主題化されることが多い。

第三に、経験主体を表す名詞句について述べる。感情形容詞の経験主体については、第5節で考察したように、純然たる主題表示であって、いわゆる総記のガ以外には格助詞を伴わないため、形式格は無格である。第10節で述べたように、公共性が付与されれば、経験主体は表現されないの、必須成分とは言えない。そして、その意味格は、文字通り経験者格 (Ex) である。

属性形容詞の場合には、第9節で論じた通り、個別化の二格によって表されるが、これはもちろん、必須格ではない ((38))。

(38) 私には空が赤い。

この二格は、いわゆる与格主語構文 (動詞文②のような可能構文など) に表れる経験者格と同等のものと考える。経験者格は、動作動詞の必須格となることがない点で対象格と異なり、意志性を持たない点で動作主格とも異なる。

第四に、第9節で一度言及したが、必須格として二格を取る形容詞の一類がある。[表3] の形容詞文③の「優しい」などは、二格名詞句に対して一種の指向性を持っており、動詞文③の二格名詞句と同じ意味格を認めることができる。ここでは、それを目標格 (G) としているが、これを相手格 (Patient) とする立場もあることを付記する。

なお、他に形式上、格関係を有するものとして、[表4] の例文中の格成分が

挙げられる。これらはすべて「基準設定」のための名詞句である。

[表 4] 形容詞文における基準設定の格成分

形式格	例文	格成分の意味
ヨリ	(a) 次郎は太郎より若い。	比較基準
ト	(b) 色が見本と同じだ。	照合基準
ニ	(c) 彼の思考力はゼロに等しい。	照合基準
	(d) この紐は帯には短い。	適合基準
	(e) 横浜は東京に近い。	距離基準
カラ	(f) 甲府は東京から遠い。	距離基準
ニシテ	(g) 舞の海は力士にしては小さい。	範囲基準

筆者は、前稿③ p. 18 で、形容詞に「対基準性」という意味特性があることを述べたが、ここに挙げた例文においては、いずれも、形容詞の通常の使用において暗黙のうちに設定される基準とは異なる基準を設け、それを前提とした経験の報告を行っている。従って、その基準を無視して対象格と形容詞の直接の意味関係を捉えることはできない。例えば、(a)で「次郎」が80歳で「太郎」が90歳だとすれば、「太郎より」という基準設定を無視して、直接に「次郎は若い」という命題的意味構造を想定することはできない。他の例もすべて同様である。(g)の範囲基準というのは、「力士」という範囲に限定すれば「小さい」うちに入るといような場合で、これも一般人よりは大きいのだから、直接に「舞の海は小さい」という命題的意味構造を想定することはできない。これらは、本来、形容詞の意味の中に内包されているはずの「基準」が、特殊であるために分化して言語化したものと言うべきである。従って、対象格 ((a)では「次郎」) は、基準を含めた形容詞 (同じく「太郎より若い」) の全体と意味関係を有するわけである¹⁵⁾。先に若干の問題点としたのはこのことである。つまり、形容詞は、各名詞句との意味関係を個別に有するような求心力を持っていないのではないか、という疑問である。ただ、本節では、これ以降の考察の前提として、ある種の形容詞文において「経験者格」と「対象格」の二つの意味格を認めておく必要があり、形容詞が

取る意味格の記述を試みた。

15. いわゆる部分主格について

[表3] に示されていない種類の形容詞文として、有名な(73)に代表されるような種類の二重主格構文がある。

(73) 象は鼻が長い。

この種の構文のユニークさは、「象」と「鼻」という二つの名詞句が形容詞「長い」に対して有する意味格が共に対象格であって共通していることである。

(73)' 象は 鼻が 長い。

+ O + O + Adj

これは、格文法の創始者フィルモアが述べた「単文異格の原則」、即ち、一つの単文中に同じ意味格が二度表れることはないという原則に反する。これに対する説明としては、三上章のハによる代行という説明で十分である。つまり、本来、「長い」に対して一つの格成分を成していた名詞句「象の鼻」のうち、「象」だけが主題化したことによって生じた構文と考えるのである。

(74) 象の鼻が 長い

+ O + Adj

主題をあくまでも表層構造上の形式と認めれば、意味構造の上では一つの格しかないことになり、「単文異格の原則」には反しないことになる。この限りにおいて、「二重主格構文」という呼称に示される立場、つまり、あくまでもこれを二つのガ格のうちの一つが主題化したと見る立場よりも整合性があると言える。

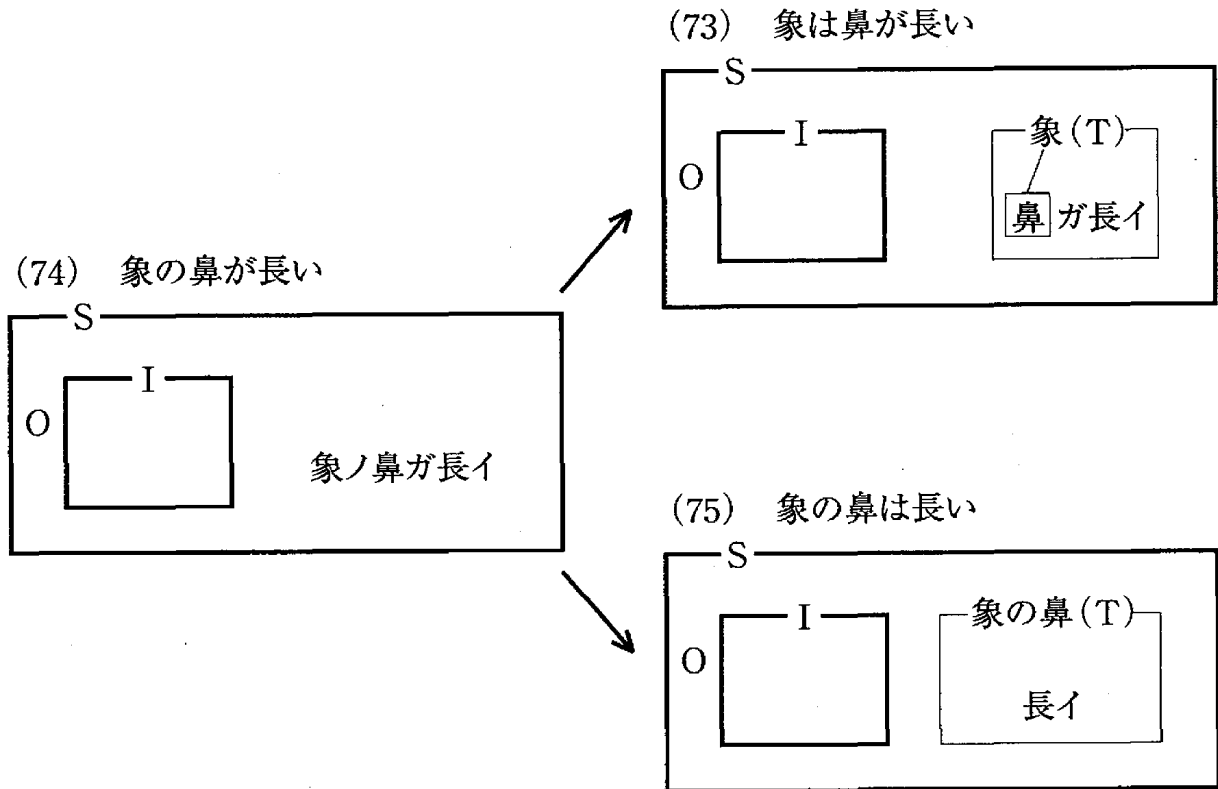
主題化されずに残った方の名詞句を、三上(1953)では「部分主格」と呼んだ。言うまでもないが、この呼称は、「全体一部分」の関係だけでなく、所有関係「太郎はメガネが大きい」や属性「太郎は成績がいい」などを代表したものである。

(74)のガ格名詞句「象の鼻」のうち、「象」だけが主題化されたものが(73)で、「象の鼻」全部が主題化されると、(75)となる。

(75) 象の鼻は長い。

これらを図に示すとすれば、[図12] のようになる。

[図12] 名詞句の一部の主題化(73)と全体の主題化(75)



(73)では、「象」と「鼻」がもともと意味上は一つの名詞句であったことを示すために線で結び、部分の語彙の範囲を厳密にするために文字囲を付した。

16. 対象格という用語について

感情形容詞文にあらわれるガ格名詞句は、これまでも一般に「対象語」と呼ばれている¹⁶⁾。しかし、それは、第14節で述べたような意味格としてではない。混乱を避けるためにも、ここで文法論史上の用語の整理をしておきたい¹⁷⁾。

古くは、湯沢 (1929) に「感情または能力の対象」という記述が見られるが、その後、時枝 (1941) での「対象語格」という記述によって、この用語は一般的になったと言ってよい。以後、鈴木 (1972)、芳賀 (1978) をはじめとして「対象語」が広く用いられ、寺村 (1982) でも「対象を表す名詞」とされるなど、枚挙に暇がない。なお、久野 (1973) のように、「目的格」と称して、動詞文のヲ格名詞句と区別しないものも少なからずある¹⁸⁾。

一方、湯沢幸吉郎は時枝 (1941) 以前に既に考えを改めている。即ち、湯沢 (1936) では、「金が百両ほしい」の「が」を主語として扱っている。橋本 (1969) でも、論理的には対象だが、言語としては主語であると主張している。

これらに対し、柴谷 (1978) では、これらの論考の用語は意味範疇と統語範疇

が混同していることを指摘しているが、先行研究への批判としては筆者もこれに賛成する。

結局、これらの対立する両説とも、いずれもガ格名詞句という形式格に対する名称なのである。「対象語」説は、ガ格という形式格に対して意味特徴による限定をかけて、それを呼称の由来としたものに過ぎない。

しかし、筆者は、ここで用いられている「対象」という用語は、認識論的に言うところの「内的な感情が向けられる外的対象」に従ったものであり、意味格（深層格）の名称としてこそ適切であると考え、これまでも他の論考において、「対象格」を、意味格の一つである Objective の訳語として用いてきている。形式格（日本語では格助詞の形態、及び統語範疇としての格）としては、第5節で既に述べたように、1項述語の主格と言うべきである¹⁶⁾。

本稿では混乱を起こす懸念もあったが、筆者における一貫性を重視して、敢えてこれまでの用語法を踏襲している。従って、本稿では、属性形容詞文、感情形容詞文を問わず、そこに表れるガ格を主格と認め、その意味格を対象格とする。改めて明記するならば、先行研究における用語法を除いて、本稿における筆者の論述中に用いられる「対象格」はすべて意味格である。

17. 感覚形容詞文と感情形容詞文との意味・構文上の違い

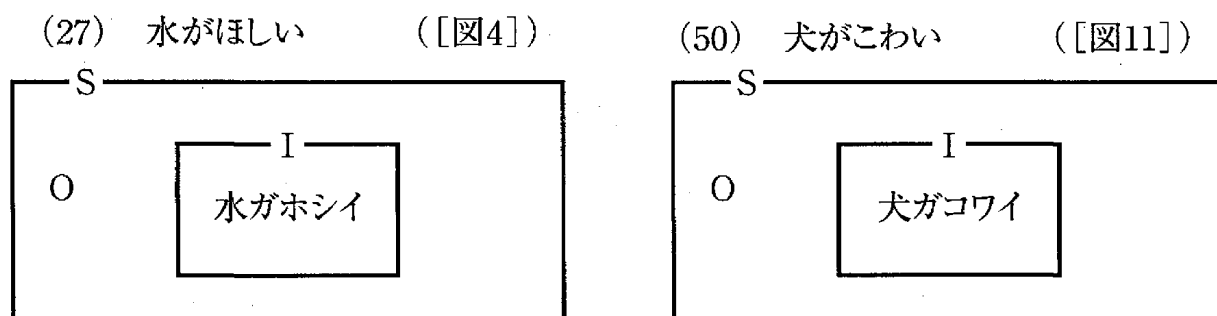
はじめに既に考察した感情形容詞文について振り返っておきたい。まず例文を再掲する。

(27) 水がほしい。 + [I]

(50) 犬がこわい。 + [I]

この種の構文は外的対象を契機とする心的態度を表現していることになる。(27)も(50)も文全体が私性を持つのであり、主格名詞句である「水」も「犬」も、私性を持つ文の命題を構成する要素として、内的経験空間に帰属するものと考えられた

[図13] 私性を持つ感情形容詞文がガ格名詞句を取る例(再掲)



([図13])。

さて、(76)のような一般に感覚形容詞と呼ばれる語彙を述語とする文と、上に述べた感情形容詞文とは、意味的、構文的に、どう違うのかを検証し、さかのぼって両者の語彙の判別基準を考察したい。

(76) 痛い。 + [I]

(76)は感情形容詞と同様で、内的経験空間において生成される。

まず、意味的にはどうか。この種の形容詞が要求する対象格には、主体から分離していないという点で「外的対象」とは呼びがたい名詞句が表れ得る。これを暫定的に「主体部分」と呼ぶことにする。これが一般的な判別基準とされている。

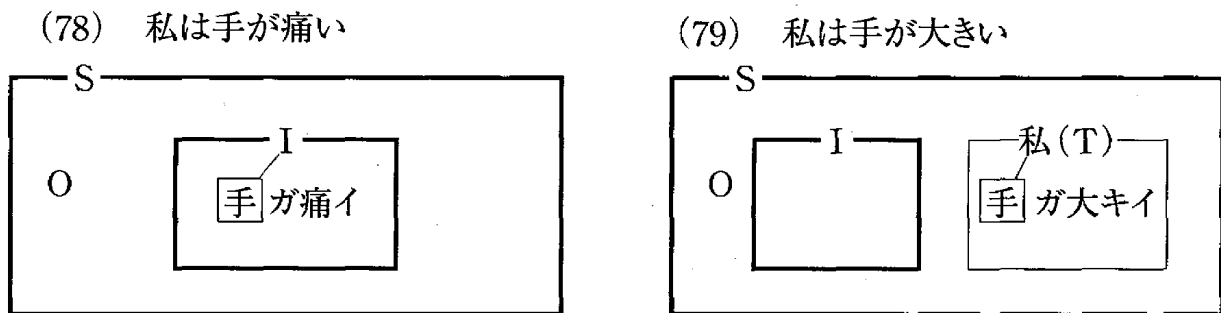
(77) 手が痛い。 + [I]

「手」は人間の肉体の一部である。この構文は、(77)や(50)と違って、第15節で考察した部分主格の性質を持っているものと考えられた。つまり、主題とガ格名詞句の関係に限って言えば、(77)の主題を明示した(78)におけるそれと、属性形容詞文である(79)におけるそれとが同じとみなすことができる。そういう種類の構文が感覚形容詞文だということになる。これを図示したのが[図14]である。

(78) 私は手が痛い。

(79) 私は手が大きい。

[図14] 感覚形容詞文(78)と属性形容詞文(79)に表れる部分主格



(78)の意味格を表示すると、(78)'となる。

(78)' 私は 手が 痛い。

+Ex +Ex +Adj

つまり、意味構造としては、一つの名詞句(私の手)が経験者格だということである。

では、感情形容詞文との構文上の違いについてはどうか。(50)「犬が可愛い」のように外的対象に公共性を付与しやすい場合には、(51)「犬は可愛い」のように、対象を主題化することが可能であることは、第10節で考察した通りである。一方、

(77)の対象である「主体部分」を主題化した(80)は、非文となる。

(80) *手は痛い。

ここで対比のハと解釈した場合には非文ではなくなるが、その場合も「手」は公共性をもったものではなく、「私の手」に限定される。これは、「痛い」が意味的に持つ内部指向的性質が肉体の部分を表す名詞句と共起することによって、否応なしに「手」が主体部分に限定されることによる。

もっとも、(27)「水がほしい」のように、外的対象に対する感情でありながら、その語彙的意味が持つ特徴により、命題全体に公共性を付与しにくいものもあるが、感覚形容詞文において主体部分に公共性が付与しにくいのは別の現象と考える。つまり、[図14] (78)では対象格「手」が、線で結ばれた全体一部分関係によって内的経験空間（I）に拘束されており、この命題が外的経験空間（O）で生成されることを拒否する。この点が、感情形容詞文との決定的な違いである。

一方、外的対象を対象格とする感覚形容詞文では、そのような制約がなくなり、感情形容詞との構文上の違いはなくなる。(81)では、(77)「手が痛い」と意味的にも構文的にも違いが見出せない。

(81) 注射が痛い。 + [I]

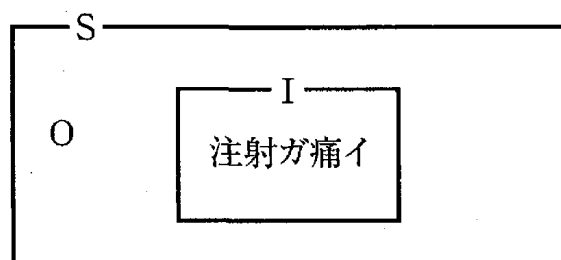
しかし、この例文の「注射」のような外的対象に対する痛みには公共性が付与しやすく、(51)「犬はこわい」型構文が容易に成立する。つまり、(80)「手は痛い」は非文だったが、同じ構文構造の(82)は非文ではないのである。

(82) 注射は痛い。

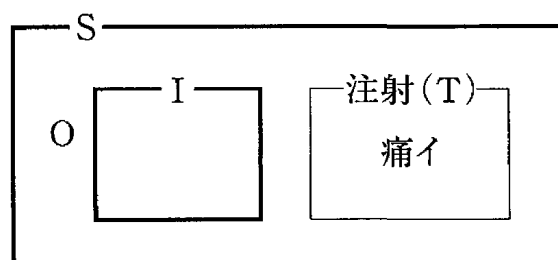
(81)、(82)をそれぞれ図示すると、[図15] となる。この場合、[図14] (78)のように、対象格が全体一部分関係によって内的経験空間（I）に拘束されてはいないので、命題全体に公共性が付与され、「痛い」を外的経験空間で生成することが可能になる (82)。両者の関係は、第10節の [図11] で示した通り、「こわい」における(50)と(51)の関係と全く同じである。

[図15] 外的対象を対象格とする感覚形容詞文

(81) 注射が痛い



(82) 注射は大きい



18. 内的経験としての感覚における外的対象と内的対象との意味的共通性

前節では、感覚形容詞文と感情形容詞文の構文上の違いをもたらすのは、「主体部分」という対象格の特殊性によることを検証した。外的対象である「注射」には公共性を付与することができるのに対し、主体部分である「手」には公共性を付与することができないという違いの帰結である。しかし、同時に、その考察の中で、(77)と(81)とは意味的にも、構文的にも違いがないとも述べた。

(77) 手が痛い。 + [I]

(81) 注射が痛い。 + [I]

つまり、構文構造が問題となる命題レベルでは、名詞句そのものの潜在的な性質の違いによって、どのような発話の素材となるかが異なってくるが、既に内的経験空間で生成された発話のレベルでこの両者を見比べた場合には、むしろ全く同じ構文なのである。さらに一步進んで、「意味的にも」違いがないというのは、言い過ぎのように思われるかもしれないが、これを認識論的な議論の俎上に乗せるならば、実に興味深いことに思い至る。

例えば、通常人間が外的対象と呼ばれるものを知覚する際には、知覚の主体である自己自身の存在は忘れられているのが普通である。「あ、雨だ!」という場合、話者の関心は専ら対象の方に向けられており、外的対象としての「雨」に言及するのみである。それが室内から窓の外を眺めていて、つまり視覚によって知覚されたのか、雨音が聴覚によって知覚されたのか、それとも、戸外で冷たいしずくが皮膚によって触覚として知覚されたのか、そのいずれであるのかに普通我々は言及しないし、仮に言及しようとしても、単一構造の命題の中にそれを含めて述べることは少なくとも日本語ではできない。「雨が見える」、「雨を感じる」等と言うとすれば、それは全く異なる表現意図を持ったものと言わざるを得ない。

確かに、これまでも、自己実在はア・プリオリな実在ではなく、外的対象という他者存在の知覚においてのみ自己が存在する、との主張はあった。しかし、(77)が何らかの肉体の外側の外的対象を知覚したことによって生じたものだという保証はない。神経痛やリューマチのように「手」それ自体の痛みによって(77)を発話するに至ることも何ら不思議ではない。この場合、心的経験の主体である話し手にとっての認知のあり方としては、「手」は対象化されていると考えるべきである。要するに、知覚は「注射針によって痛い」のか、単に「内的にのみ痛い」のか、その痛みそのものを区別しないと言ってよい。

このような立場からは、これまでの「主体部分」という呼称に対して問題提起せざるを得ない。つまり、認識論的には、主体部分の対象化されているのであって、経験主体からは質的に隔絶している。たまたま、経験主体を肉体に置き換えた時に「全体一部分」の関係となるに過ぎない。言い換えれば、(78)「私は手が痛い」という時の「私」は経験主体としての私であって、手や頭や首や腹や足などの肉体の集合体としての「私」ではないのである。この点において、(79)「私は手が大きい」とは決定的に異なっている。以上の議論を踏まえるならば、「主体部分」はむしろ「内的対象」と呼ぶのがふさわしいと考える。

この種の感覚形容詞、即ち、肉体の部分を対象化できる形容詞の語彙は限られていて、「かゆい、くすぐったい、だるい、苦しい」や関西方言の「しんどい、えらい、こそばい」など、少数である。本来、正常な人間の日常活動においては肉体の部分を対象化する必要はないようにできている。(83)を例にとって考えたい。

(83) 胃が痛い。 + [I]

胃は摂取された食物（外的対象）を知覚してそれに応じて胃液を分泌するが、本来このことは人間の自我意識には上らない。胃が意識に上るのはもっぱら胃自身の不調による不快感が発生した場合で、いわば異常事態である。そのため、これらの語彙は不快感を表現するものが多く、その不快感は異常事態であるが故に、その経験としての不快さの質の多様さよりも、不快感そのもののほうが人間にとっては重要であり、多様な知覚が不快感という尺度で統合されていくため、語彙が限られてくると考えられる。

通常は感情形容詞である語彙も、肉体の部分で局所的にそのような感情が感じられるような場合には、感覚形容詞の構文で表すことも可能である。

(84) 口がさびしい。

理由もなく飴がなめなくなったりする時の感覚として、しばしば用いられる表現である。また、「熱い、冷たい」は一見すると属性形容詞のようだが、「こわい」と同様、内的経験空間においても外的経験空間においても生成される。その場合、内的経験空間での構文は「痛い」型の構文を構成する。

(85) 熱い。 + [I]

(86) 耳たぶが熱い。 + [I]

従って、「熱い」と感じるときの、外的対象についても、それが肉体外の物質であるのか、肉体の器官であるのかについて、言語的に区別しないのであり、つまり、認知として区別する必然性を持たない。肉体の器官を対象化できるとなれば、主体そのものは無限に後退していく。脳以外は対象化できるが、脳は主体である、

などという論理は成り立たない。事実、「頭が熱い」と言うこともできる。

まさに、我々にとって我々の肉体自身はすべて対象化できるものであり、我々を我々たらしめる主体そのものたる「私」は、物質的な存在ではない、ということがこの構文からも証明できる。

なお、川端(1986)には、外的対象と内的対象の両方を一文中に言語化した例文が三つ挙げられている。そのうちの一つを次に示す。

(87) からたちの棘が掌に痛い。

ここでは内的対象が二格で表れているが、日常的表現というよりは、いくらか修辭的表現という印象が強い。この場合の二格は個別化の二格と同種と見るべきで、経験者格である内的対象が二格を取る貴重な例ということになる。

19. 内的対象をもともと含意している感覚形容詞

第8節で考察した(35)と同様、(88)、(99)は一般に属性形容詞文と考えられている。

(35) 空は青い。

(88) 太陽はまぶしい。

(89) 工事の音はうるさい。

しかし、これらが無主題の現象文の形を取ったものを見比べてみたい。

(36) 空が青い。

(90) 太陽がまぶしい。

(91) 工事の音がうるさい。

(36)は依然として属性形容詞文だが、(90)や(91)では、「太陽」、「工事の音」という外的対象に対する内的な知覚(それぞれ視覚、聴覚)が表現されているように感じられる。これは、それぞれ視覚、聴覚という外的対象への公共性を持った知覚だけでなく、目、耳という肉体の器官の「痛み」という、私的な心的表象を伴うからである。そのため、これらと、(92)、(93)は似たような状況で、似たような効果を意図して用いられているとみることができる。

(92) 目が痛い。 + [I]

(93) 耳が痛い。 + [I]

この考えでは、(88)、(89)を、内的経験空間で生成されたものと解釈することになり、(94)、(95)となる。つまり、「私は」を補ったものが意味的に等価であると見なし得る。

(94) 太陽がまぶしい。 + [I]

(95) 工事の音はうるさい。 + [I]

このような解釈が一般的ならば、「まぶしい、うるさい」は第10節で考察した「こわい」のように、外的経験空間でも生成され得る感情形容詞ということになる。

しかしながら、構文的には肉体の部分を対象化することができない (96), (97) ため、語彙的意味としては感覚を表してはいるが、肉体の部分を対象化しない。

(96) *目がまぶしい。

(97) *耳がうるさい。

むしろ、(98), (99)のような表現となる。

(98) 太陽が目にもまぶしい。

(99) 工事の音が耳にうるさい。

この場合は、(87)「からたちの棘が掌に痛い」と同じ構文となり、一種の感覚形容詞に分類されることになる。ただ、これらの文で経験主体を言語化する場合に、「私は」であるか、「私には」であるか微妙である。それによって、これらの文が内的経験空間で生成されるのか、外的経験空間で生成されるのか、解釈が違ってくる。この点に関しては、別な範疇を設けて区別したほうがいいかどうかを含めて、現段階では十分な調査が行われていないので、保留とする。

いずれにせよ、西尾 (1972) の指摘通り、これらは内的対象となる肉体の部分が意味としてもともと形容詞に含まれているために、通常は言語化されないと言える。そして、外的対象だけが言語表現として残るために、公共性が強く感じられ、属性形容詞的な性質が強くなるのである。

そして、このような文で、内的対象を言語化する際には、個別化の二格と同様の二格が用いられ、そのように含意されているものをわざわざ言語化するという一種の強調が一定の修辭的な効果をもたらすとも言える。

この種の語彙として、「まばゆい、やかましい、暑い、寒い、涼しい」、関西方言の「ぬくい」などがある。

20. 感覚動詞文と知覚動詞文について¹⁹⁾

第13節では感情動詞文について述べたが、感覚形容詞という範疇を認めたが、動詞についても、肉体の部分を対象化できる感覚動詞という分類を設けることができる。(100)~(104)は感覚動詞文の例である。

(100) 胃が痛む。 + [I]

(101) 歯がうずく。 + [I]

(102) やけどのあとがヒリヒリする。 + [I]

(103) 神経痛でひざがズキズキする。 + [I]

(104) 目がチクチクする。 + [I]

これらは、いずれも「私は」を補うことができるので、内的経験空間で生成されていると認められる。+ [I] はそれを表している。これらは感覚形容詞文と多くの特徴を共有している。しかし、感覚形容詞が外的対象を対象格として取り得るのに対し、感覚動詞は、内的対象（肉体の部分）しか対象格として取り得ない。

(105) *注射が痛む。

(106) *注射は痛む。

(107) 注射のあとが痛む。 + [I]

前節で考察した「まぶしい、うるさい」のように内的対象を含意するわけではないが、構文はそれらに似て、内的対象を二格で表す感覚動詞もある。

(108) 氷が歯にしみる。

ただし、「私は」を言語化できるかどうかは、やはり微妙なので、厳密な分類に関しては、これも保留する。

一方、構文的に感覚動詞とは異なる振る舞いを見せる一類の動詞がある。聴覚、視覚、嗅覚といった知覚を表す動詞である。それを述語とする文を以下に示す。第13節の再掲となる例文を含む。

(67) 妙な音が聞こえる。

(68) 遠くに山が見える。

(109) 腐った野菜がにおう。

これらの例文では、動詞の語彙的意味には主観性は認められるものの、ガ格に表れる対象格が外的対象であり、その知覚に関しては公共性が強く認められる。従って、属性形容詞と同様、外的経験空間で生成される。その結果、「思う、困る」などの感情動詞と違って、経験主体を言語化する場合、属性形容詞と同様に個別化の二格を用いる必要があった。

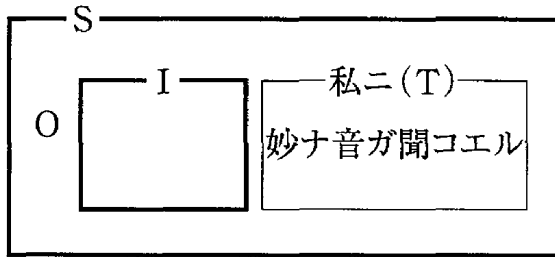
(70) 私には妙な音が聞こえる。

この場合、「私は」を補うと、主観的な知覚の表出の文ではなく、人物の属性（潜在的な能力）を表す文となる ((110))。いずれも外的経験空間で生成される。

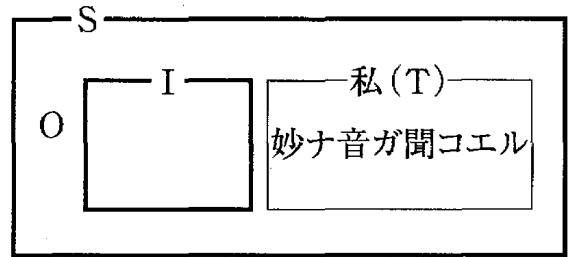
(110) 私は妙な音が聞こえる。

[図16] 外的経験空間で生成される知覚動詞「聞こえる」

(70) 私には妙な音が聞こえる



(110) 私は妙な音が聞こえる



また、「におう」は「見える、聞こえる」のように潜在的能力を表さないため、「私は」を補うと非文となる (111)。

(111)*私は腐った野菜がにおう。

結局、(67), (68), (109)のいずれにおいても+ [I] を添えることはできない。

以上のように、この種の知覚を表す動詞は、感情動詞とも感覚動詞とも異なる構文特徴を有し、形容詞分類における属性形容詞に属するのだが、一方で、感情動詞、感覚動詞に特有の特徴を共有している。例えば、テンス・アスペクトに関して、非過去形の言い切りが未来ではなく現在を表し、かつ、テイルを下接することもできる点である。この種の動詞を知覚動詞と呼ぶことにする。

知覚動詞に属するものとしては、「音がする、味がする、臭いがする」や、擬態語のサ変動詞「ザラザラする、ベトベトする、ヌルヌルする」などがある。

(71) 妙な音がする。

(112) 床の表面がヌルヌルする。

これらの例から、知覚動詞が表すのは、先に挙げた聴覚、視覚、嗅覚に、味覚、触覚も加えて、五種の知覚の全般に渡る。これらはさらに、「聞こえる」や「見える」のように二格を用いて経験主体を表現できるものと、二格を用いてもなお、経験主体を表現できないもの ((72), (113)) とに分類できる。

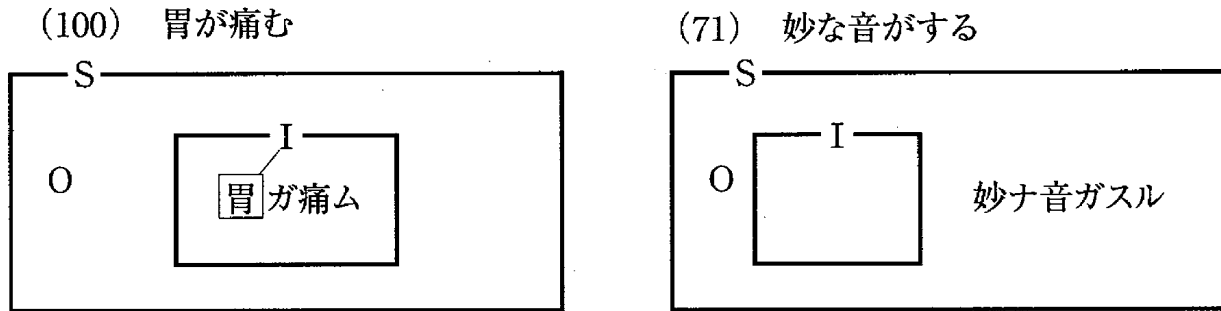
(72)*私には妙な音がする。

(113)*私には床の表面がヌルヌルする。

敢えて下位分類を設けるならば、前者を知覚行為動詞、後者を知覚現象動詞とも名付けるのがよいと考える²⁰⁾が、本稿は分類そのものが目的ではないので、両者の差異を重視せず、これ以降は一括して知覚動詞として扱う。

感覚動詞と知覚動詞の構文的な違いは、[図17] のように歴然としている。

[図17] 感覚動詞文(100)と知覚動詞文(71)



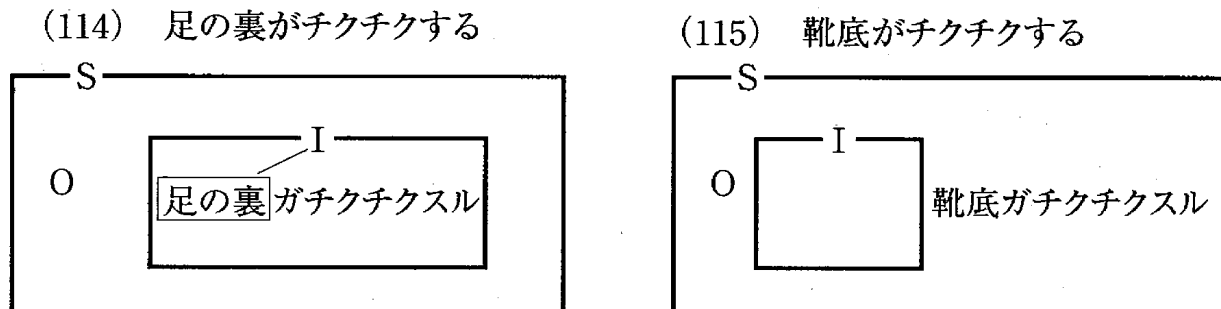
つまり、感覚動詞では、当該の感覚は発話者自身の内側で生じたものであり、知覚動詞では、当該の知覚は発話者の外側に生じた現象に対する知覚である（つまり、公共性が高い）。そして、両者の違いが構文上の違いに反映しているわけである。

感覚動詞としても知覚動詞としても用いられる特殊な動詞として「チクチクする」が挙げられる。(114)は(104)「目がチクチクする」と同類の構文であり、感覚動詞である。一方、(115)は外的対象に対する触覚の表現であり、知覚動詞である([図18])。

(114) 足の裏がチクチクする。 + [I]

(115) 靴底がチクチクする。

[図18] 感覚動詞文(114)とも知覚動詞文(115)ともなる動詞「チクチクする」



(114)は、(116)のように第一人称の経験主体を表現できるが、(115)では(117)が非文となり、(118)のように個別化の二が必要となる。

(116) 私は足の裏がチクチクする。

(117)*私は靴底がチクチクする。

(118) 私には靴底がチクチクする。

この点に関しては、知覚動詞文は形容詞文の分類における属性形容詞文に対応する構文的特徴を有していると言える。

また、感覚動詞と知覚動詞はこの「チクチクする」などの若干の例外を除き、

異なる語彙を有している。しかしながら、その意味素性は実は共通しているのではないかということが、その例外である「チクチクする」から図らずもうかがえる。つまり、対象格が主体部分＝内的対象ならば感覚動詞、外的対象ならば知覚動詞、というように、対象格の帰属空間がそのまま当該動詞文の生成空間となるということである。

21. 内的経験の直接表出における日英対照

英語では、痛みに関する命題記述的な表現⁽¹¹⁹⁾と、痛みの直接的な表出⁽¹²⁰⁾とは、全く異なる表現形態を取る。

(119) I have a pain. (私は痛みを感じる。)

(120) Oh! (おおっ!)

ヴィトゲンシュタインが用いたこれらの英語の表現⁽²¹⁾と違って、日本語では、記述的でありながらかつ、心的状態の直接的表出であることが可能である。日本語話者は痛みを感じた時に⁽¹²¹⁾のように叫ぶことが多いが、この表現には形容詞が用いられ、記述的な⁽⁷⁶⁾と本質的に同じ構造をしている。このことも、日本語において内的経験空間が仮定されるべきことを理論的に保証するものである。

(121) イテッ!

(76) 痛い。 + [I]

命題構造を備えていることにより、さらに記述を累加していけることは日本語も英語も同じであるが、日本語の場合はこれらの記述が直接的表出の上に成り立っていると言ってもよいところに注目すべき点がある。

(122) I have an acute throbbing pain in my left eye.

(私は左目に激しい刺すような痛みを感じる。)

(123) 左目が激しく刺すように痛い。 + [I]

(122)は(119)の命題の上に累加的に詳しく記述されたものであって、(120)の直接的表出とは無関係である。それに対して(123)は、(76)に累加的に記述された命題であり、故に、日本語の直接的表出である(121)も、一種の命題構造を備えているといえることができる。

さらに、英語ではやけどの痛みは(120)と区別されずに表出されるが、日本語では区別されて(124)のように表出される。

(124) アチッ!

この表出のもととなっているのは、第18節で述べた⁽⁸⁵⁾の構文である。

(85) 熱い。 + [I]

(86)はそれを記述的な表現としたものであり、さらに(125)のように詳しくすることもできる。

(86) 耳たぶが熱い。 + [I]

(125) 耳たぶが激しく燃えるように熱い。 + [I]

そもそも、痛みの直接的な表出でありながら、(121)と(124)を区別して用いるということが非常に特徴的である。英語での(120)はただのうなりにしか過ぎないのに、これらは両者とも既に記述的な言語行動として位置づけられうる性格を持っているのである。日本語において内的経験空間を仮定することはまことに必然的と言える。

22. 結語

本稿で考察したことをここに整理したい²²⁾。

まず、形容詞文をおしなべて経験を表出するための表現形態と認め、その経験が話者の内側に帰属するものとして表出される場合と、話者の外側に帰属するものとして表出される場合の二通りがあると考えた。ここで、メンタル・スペース理論の一つの応用であり、筆者が情報帰属理論と呼ぶ方法論を用い、想定された認知の様態における、話者の内側を内的経験空間 (I)、同じく外側を外的経験空間 (O) として区別した。

このように帰属空間を区別することの意義は、第一に、感情形容詞文と属性形容詞文の構文的特徴の違いを明快に記述することができる点にあった。例えば、感情形容詞文で主語が第三人称の名詞句の場合、陳述緩和的モダリティ表現が必要となるが、それは本来内的経験空間で生成される感情形容詞文を、臨時に外的経験空間で生成するために必要となる写像の関数であるとみなすことができた。

情報帰属理論は、主題論にも一石を投じている。助詞ハによって導入された名詞句は一種の話題の場のようなものを設定するが、情報帰属理論では、それを外的経験空間の中に設けられる一種の小空間として扱い、主題空間 (T) と呼ぶのである。日本語では、第一人称の名詞句も助詞ハを用いて主題化することができるわけだが、このことは、内的経験空間が言語形式としては、主題空間と区別する必要がないことを意味する (本稿は一種の意味論研究なので区別している)。ここに、人称という認識論的な意味範疇と主題という言語形式との不思議な連続性が見て取れる。情報帰属理論はこの不思議な連続性を記述する一つの方略なのである。

日本語における主題を、命題の背後にある別なるカテゴリーと位置づけ、これ

までの命題とモダリティの二分法を批判し、主題と命題とモダリティの三分法を提唱した。この場合、主題とは、言語を生成する心的空間の領域を限定することとなる。話し手によって文が発話されれば、その文の主題は、聞き手の主観空間にも、同様の領域限定を行う。この時、言語形式として提題されなくとも、場面や文脈や話者間の了解事項などによっても主題空間は成立する。従って、ここでの主題はもはや意味論上の概念といってよい。筆者のこれまでの論考のうち、山岡（1987）、山岡（1988a）で述べてきたのはこのことであった。

助詞ハとガについても、空間の表示と位置づけるか、空間内の命題の要素と位置づけるかによって、主題と対比、また総記と主格という、構文上の異なる用法を説明することができた。またさらに、主題空間内、あるいは、内的経験空間内に、命題の一部として設けられた小空間を対比空間（C）としたが、そのいずれの場合も、助詞ハを用いながら主題導入ではない、対比における構文特徴が共通して見られ、言語事実と合致した。

モダリティに関しては、動詞＋接辞タイの構文について、タイをモダリティ形式とするのではなく、構文全体を感情形容詞文として扱うべきことを主張した。それによって従来の形式偏重のモダリティ論を批判し、主題と同様、モダリティをも意味論上の概念として扱おうとしている。このことは、筆者のこれまでの論考、すなわち山岡（1988b）、山岡（1989）で述べてきたことと一貫している。

次に、形容詞文の構文に付与される個別性・公共性という意味素性を想定することによって、属性形容詞文・感情形容詞文のそれぞれ派生的な構文について説明した。属性形容詞文が個別化の助詞ニを用いることで個別性が付与される構文、そして、感情形容詞を外的経験空間内の主題空間で生成することによって公共性が付与される構文、以上の二つの構文について詳細に論じた。そして、形容詞の語彙的意義中の意味素性として認められる主観性と構文上に生じる意味素性である個別性とが融合した場合に「私性」が生じるという考えを示した。そして、この「私性」こそ、内的経験空間で生成される発話の特徴づける極めて特殊な意味特徴なのであった。

さらに、「象は鼻が長い」型の部分主格の、情報帰属理論における位置づけを明確にし、これを用いることによって、感覚形容詞文が感情形容詞文から区別される必然性に言及した。ここでも情報帰属理論はすぐれた説明力を発揮した。

なお、本稿では、感情形容詞文・感覚形容詞文と共通の特徴を持った、感情動詞文、感覚動詞文、さらに知覚動詞文と呼ばれる類の動詞文などについて、同様に情報帰属理論を用いて明確な記述が可能となることを主張している。

従って、情報帰属理論は、筆者のこれまでの論考が集約されたものであると同時に、今後、主題論、動詞論として発展していく可能性を有していると言える。むしろ、本稿における形容詞文の研究はそのための序編でしかないのである。

最後に、本稿は、「認知」をもとに「言語」を論じた言語学なのか、それとも、「言語」をもとに「認知」を論じた認知科学なのか、ということに言及しなければならない。このことを端的に示す事例として、蛇足を承知で以下の考察を追加したい。

人間の外的対象に対する知覚には、一般的に視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚の五種が認められる。第11節では各形容詞文において、公共性と個別性のどちらが認められるかを記述したが、この点で、五種の知覚に違いがある。以下の例文からわかるように、内的経験空間で生成されない視覚・聴覚・嗅覚の表現は公共性を有し、内的経験空間で生成される味覚・触覚の表現は個別性を有する。

- | | | |
|---------------------|------|-------|
| (126) *私は空が赤い。 | (視覚) | } 公共性 |
| (127) *私は工事の音がうるさい。 | (聴覚) | |
| (128) *私はゴミがくさい。 | (嗅覚) | |
| (129) 私はわさびが辛い。 | (味覚) | } 個別性 |
| (130) 私は靴底が痛い。 | (触覚) | |

この構文上の違いは認知の様態と密接に関連している。味覚と触覚は、外的対象と知覚器官の接触を前提とするので、認知の様態としては他者にも同じ知覚がもたらされるという知覚共有の信念（前稿③）を持つことができないのである。

ここでは、知覚表現における構文の違いを内省することが、そのまま知覚における公共性・個別性を内省することに直結すると考えていることは確かだが、ニワトリが先か卵が先かを決定することは果たしてできるだろうか。このような構文的特徴があるから、このような認知の様態だ、というのか、それとも、このような認知の様態だから、このような構文的特徴をもたらし、というのか——。筆者は、どちらでもないと考えている。実は、本稿の構想段階に基礎論として述べた前稿①の中で、このことに言及している²³⁾。

即ち、認知と言語は対等な関係にあり、いずれかがいずれかに従属するのではないと考える。認知は意味の構造と密接な関係にあるはずだが、言語においては形式の方がはるかに研究しやすく、しかも制約という点でも、形式が意味に課す制約の方がはるかに大きく、結果として、一種の経験科学としての方法論から、言語表現の制約にある程度我々は振り回されなければならないのである。従って、言語表現の上から観察できる事象をもって、意味構造を抽象し、そこに普遍的な

る何かが見出せた時に、それを「認知」と呼べるわけである。ホーレンシュタインの立場も概ね、そのように理解してよいだろう。

ここで、当然のように、諸言語の構造の違いと言語的普遍という問題に思い至る。英語では構文的に特徴を持った感情形容詞を指摘できないが、それは本稿で定義した「主観性」を語彙的意義の中に持つ形容詞がないからである。つまり、自己自身の内的経験と他者の振る舞いとを区別しないことになる。これによって、第21節に述べたような、日英の感情表出の違いが生じるわけである。この事実、日本語という言語の制約を無視することの危険、すなわち、「言語」から短絡的に「認知」を導き出すことができると考える一部の生成文法論者——個別言語の構造を記述するために仮設されたに過ぎない意味構造をそのまま普遍的な認知構造と信じて疑わない者のこと——に対する批判となる。

しかし、だからといって、本稿で指摘した言語現象を引き起こす生活世界は日本人固有のものでは決してないはずである。つまり、一つの構文構造と一つの認知が一对一対応するという前提を持つ必要はないのである。他の言語においても、日本語とは異なる仕方で反映しているはずだと考えるのは自然ではないだろうか。しかも、認知の様態そのものが個別言語の制約を受けることを全面的に否定する必要もない。

故に、各言語の構造に直接アプローチしながら、認知との関連において、一定の距離を保ちながら、普遍的なるものを指向していく他にないのではないだろうか。例えば、英語においても、各人称範疇の性質は決して対等ではない。少なくとも第3人称には、文中において人称代名詞以外の普通名詞や固有名詞を使用することができるという、第1、第2人称にはない特徴がある。このような人称間の違いを緻密に調べ上げていくことによって、「個別言語」と「普遍的意味」との関係におけるパラメータ——つまり、「言語」と「認知」の関係におけるパラメータ——が浮き出てくるはずなのである。そのことを述べて、本稿を締めくくりたい²⁴⁾。

【注】

15) この点に関しては、川端 (1983)、同 (1986) の指摘を本稿の立場で言い換えたのに過ぎない。また、[表2] で目標格としたのも、「対象基準」とでも呼ぶべき基準設定と言えなくもないし、属性形容詞文における個別化の二格 (ニトツテ格) も、「主体基準」とでも呼ぶべき、一種の基準設定と言えなくもない。これらは、述語としての形容詞にどのような位置づけを与えるかという立場によって、根本的に違ってくる。

16) (I) 第5節 p.9 でこのことに言及している。また、川端 (1983)、同 (1986) では、

「対象(語)格としての主語」としている。筆者の考えは今のところこれに最も近い。

17) 先行研究として挙げた諸説の所在は、挙げた順に以下の通りである。

湯沢幸吉郎(1929) p.259, 時枝誠記(1941) p.373, 鈴木重幸(1972) p.79, 芳賀綏(1978) p.87, 寺村秀夫(1982) p.145, 久野暉(1973) p.48, 湯沢幸吉郎(1936) p.457, 橋本進吉(1969) p.103

18) 柴谷方良(1978) p.226 による。ただし、柴谷はそのような混同を指摘した上で、意味的視点を排除して、尊敬語化規則や再帰代名詞化規則といった統語論上の現象を論拠として、この種のカ格名詞句を「直接目的語」としている。一方、本稿の筆者は、主語と主格に異なる定義を与えるので、柴谷と立場を異にしている。これについての詳細はここでは論じない。

19) 本稿は形容詞研究をテーマとしているため、本節では、その関連で誘引される部分に限定した動詞の考察を行う。改めて、動詞分類における感情、感覚、知覚の各々の構文的特徴などを別稿にて考察する予定だが、一言だけ述べるならば、本稿の定義では、「胸を痛める、気をもむ、肝を冷やす」などは、感情動詞(句)とは言えない。話者を経験主体とする直接的感情表出の発話に用いることができないからである。これに対し、「胸が痛む、気になる、腹が立つ」などは、まさに感情動詞(句)である。このような分類は、一般的にあまり意識されていない。『日本語学』第十五巻第三号の特集「感性動詞語句」(1996年3月号)でも、このことに言及した論考は一つもなく、たまたま挙げられている感情動詞(句)も、「いらいらする」一つだけである。

20) この下位分類はあくまで構文的特徴を基準にしており、当然のことながら、この名称は意味的な定義によるものではない。例えば「におう」は、意味的には「聞こえる、見える」と同類のように思えるが、構文的には知覚現象動詞となる。

21) ヴィトゲンシュタインが現代英語で一般的な“Ouch!”を挙げなかったのは、俗語的であるためか。もちろん、命題的なものを一切含まない点、痛みと熱さを区別しない点などは、“Oh!”と共通していることは言うまでもない。

22) 本稿のⅠ、Ⅱの各節の表題を以下に再掲する。

(Ⅰ) 0. はじめに

1. 感情形容詞の私性
2. 話者に内在する内的経験空間
3. 外的経験空間内に導入される主題空間
4. 様相空間への関数としてのモダリティ
5. 命題の背後にある主題としての空間
6. 助詞ハ・ガと空間との関係
7. 対比空間の導入

(Ⅱ) 8. 外的経験を表現する属性形容詞文

9. 属性形容詞文が個別性を持つ場合
10. 感情形容詞文が公共性を持つ場合
11. 意味素性としての主観性と個別性
12. 動詞+タイの構文について
13. 感情動詞文について

23) 前稿① p.17

24) 当初、さらに一節を設けて、前稿の本稿における位置づけ、理論の修正点などを述べる予定だったが、紙幅が大幅に超過したため、別の機会に譲る。そのため、注5)で挙げた空間名のうち、相手の主観空間 (A)、言語表現空間 (L) については、結局、言及しなかった。

【参考文献】(I, IIで既に示したものは省く)

- 川 端 善 明(1983) 文の構造と種類——形容詞文——『日本語学』第二巻第五号 明治書院 128-134
- 川 端 善 明(1986) 格と格助詞とその組織『論集日本語研究 (一) 現代編』明治書院 1-40
- 柴 谷 方 良(1978) 『日本語の分析』大修館書店
- 鈴 木 重 幸(1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 寺 村 秀 夫(1982) 『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版
- 時 枝 誠 記(1941) 『国語学原論』岩波書店
- 西 尾 寅 弥(1975) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 野 家 伸 也(1989) 現象学と認知心理学『哲学』第39号 30-41
- 芳 賀 綏(1978) 『現代日本語の文法』教育出版
- 三 上 章(1953) 『現代語法序説』くろしお出版 (1972復刻版)
- 三 上 章(1960) 『象は鼻が長い』くろしお出版
- 山 岡 政 紀(1987) 日本語の「場」と人称の研究 筑波大学博士課程中間論文
- 山 岡 政 紀(1988 a) 「場」の概念『言語学論叢』第6・7号 筑波大学一般応用言語学研究室 41-65
- 山 岡 政 紀(1988 b) 疑似命令文——日本語モダリティの文法化の一事例『日本語と日本文学』筑波大学国語国文学会 左11-左19
- 山 岡 政 紀(1989) 発話行為論とモダリティ——疑似意向文をめぐって『言語学論叢』第8号 筑波大学一般応用言語学研究室 16-27
- 湯 沢 幸 吉 郎(1929) 『室町時代言語の研究』風間書房 (1955復刻版)
- 湯 沢 幸 吉 郎(1936) 『徳川時代言語の研究』風間書房 (1955復刻版)
- FILLMORE, Charles J. (1968) The Case for Case, in E. Bach & R.T.Harms (eds.) *Universals in Linguistic Theory*. 1-88
- HOLENSTEIN, Elmar (1980) *Von der Hintergebarkeit der Sprach* (邦訳『認知と言語』村田・柴田・佐藤・谷沢訳1984 産業図書)
- WITTGENSTEIN, Ludwig (1968) Notes for Lectures on "Private Experience" and "Sense Data", in *Philosophical Review*, 77 271-320

【付記】

本稿は、紙幅の都合上、同名の論文 (=『日本語と日本文学』第5号所収、1995年)、(II = 同誌第6号所収、1996年) を合わせて一編の論考となることをご了解下さい。そのため、節、例文、注、図表などが通し番号となっています。また、本編 (III) は完結編に当たるため、多少の紙幅の超過を関係各位のご寛恕により、お許し頂きました。ここに謝意を表します。

(やまおか・まさき、本学 専任講師)